

福岡・元岡遺跡群

もとおか



(前原)

- 1 所在地 福岡市西区大字元岡字池ノ浦
- 2 調査期間 第七次調査 一九九八年(平10)五月～一九九九年六月
- 3 発掘機関 福岡市教育委員会
- 4 調査担当者 吉留秀敏
- 5 遺跡の種類 集落跡・製鉄跡
- 6 遺跡の年代 六世紀後半～一世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は福岡市の西端、JR筑紫線周船寺駅の北西三・四kmに位置

し、玄界灘に突出する糸島半島東側基部にある。一帯

は標高100m以下の丘陵地帯である。丘陵は花崗岩

基盤であり、小河川により

樹枝状に浸食されている。

遺跡はこうした樹枝状に枝

分かれした谷の最奥部で発見された。

この谷はほぼ北方に開口する、幅60m奥行約200mほどの規模のものであり、遺跡の範囲は谷の開口部から奥へ150mまでである。標高は約100～400mである。

中世に貿易港として栄えた今津湾は、現在ではこの遺跡から北東約1kmの距離であるが、湾が干拓される近世以前には、海岸線はより近い距離にあったとみられる。ただし、本遺跡から今津湾や沖積地を直接見通すことはできない。

本遺跡は九州大学統合移転地の事前の試掘調査で確認された。試掘調査により、谷部から古代の焼土面と鉄滓、土器片が発見されている。

なお元岡遺跡群の調査は、九州大学統合移転地の先行取得と造成を行なう福岡市土地公社が、福岡市教育委員会に委託したものであ

り、緊急発掘調査として一九九六年より実施している。

第七次調査の発掘面積は約7500m²である。古墳時代後期の集落、飛鳥時代～平安時代中頃の建物群、製鉄関連遺構、貯水遺構、道路状遺構などが検出されている。

今回紹介する三点の木簡は、谷奥部に掘られた貯水遺構から出土したものである。この貯水遺構は検出面で幅約10m、長さ約50m深さ約2mを測る。上層からは八世紀～一世紀の遺物が出土し、中層からは主に八世紀の遺物、下層からは古墳時代から八世紀前半の遺物が出土した。三点の木簡は出土地点は違うが、出土層位

はいざれも下層であり、八世紀前半以前の遺物と考えられた。貯水槽構の西側斜面には数段の造成面があり、多数の柱穴が検出され、二間×二間の総柱建物三棟以上を含む二〇棟の建物が検出された。

8 木簡の釈文・内容

(1) 一
壬辰年韓鐵

218×(30)×5 033

(3)

(1)は左半分を欠損しているが、原形を復原できる。樹種は檜とみられる。文字列は大きく一行あり、下部は墨痕が薄くなり判読できないが、二字ほどが推定できる。「壬辰年」は出土層位や、干支年が冒頭にくる書式などから、持統六年（六九二）と考えている。

真を利用しなければ困難である。ただし「里長」は比較的明瞭に読むことができる。

(3)は上下両端が欠損している。樹種は不明である。一行の文字列
が認められる。

(2)は直接には接続しない二片からなり、本来は長さ六〇cm前後の長大な木簡である。樹種は杉とみられる。二つの断片は少し離れた位置から出土したが、上に続く断片は検出されていない。上の断片



(1)

（判読不能）や底部に「坏」と籠書された須恵器杯一点、硯三点など、また木製品として皿・槽・曲物・箸状木製品・弓状木製品・火切り白・棒・斎串・横櫛・鳥形・建築部材などが出土した。